２０２１年　京都キリスト召団聖日集会　講筵要旨見出し

２０２１年１月１０日「希望の光」（聖書随想①）
２０２１年１月１７日「主キリストの賜う「自由」の中に生きる（聖書随想②）
２０２１年１月３１日「御言葉を聴くことの飢饉」（聖書随想④）
２０２１年２月８日「今日も明日も次の日も我は進み往くべし」（聖書随想⑤）
「京都キリスト召団の会員　並びに　関係者各位」
２０２１年２月１４日「汝、この者どもに勝りて我を愛するか？」（聖書随想⑥）
２０２１年２月２１日「思い煩いからの解放」（聖書随想⑦）
２０２１年２月２８日「わが祈りの友としての「詩篇」」（聖書随想⑧）
２０２１年３月８日「２０２１年　復活節集会　ご案内」
２０２１年３月１４日「詩篇103篇（旧約の福音）：「罪」と「死」から「生命」へ」
２０２１年３月２１日「主、知り給う――詩篇139篇ほか――」
２０２１年３月２８日「主キリストの「憐憫」と「愛」」
２０２１年４月４日「復活節集会　講筵レジュメ」
２０２１年４月１１日「復活節集会への感謝と伝道の使命」
２０２１年４月１８日「わが生くるはキリスト」（ピリピ書　第２回）
２０２１年５月２日「聖書講筵に代えて」
２０２１年７月４日「「恵みの65年」への感謝」
２０２１年７月１１日「「永遠の生命」を生きる」
２０２１年７月２３日「京都くに荘での聖日集会のご案内」
２０２１年７月２５日「キリストと共なる生活」
２０２１年８月８日「各自が「神の子」としての自覚を！」
２０２１年９月１２日「恵信一如」
２０２１年９月１９日「霊戦」
２０２１年９月２６日「ピリピ書より」
２０２１年１０月３日「天国人として生きる」
２０２１年１０月１０日「天国人の特権と責務」
２０２１年１０月１７日「天国人としての特権と希望」
２０２１年１０月２４日「生命の真清水を飲む」
２０２１年１０月３１日「福音の原点」（マタイ伝９章12～13節）
２０２１年１１月７日「「天国人」の存在の拠り所と使命」
２０２１年１１月１４日「聖言と偕なる生活」
２０２１年１１月２１日「天国人の拠り所と現実」
２０２１年１１月２８日「神（主キリスト）の「選び」と選ばれた者の「使命」」
「２０２１年　クリスマス集会　ご案内」
２０２１年１２月５日「「労働（働くこと）」と「祈り（祈ること）」とは一つ」
２０２１年１２月１２日「思い煩いからの解放」
２０２１年１２月１９日「葡萄樹とその枝――天国人の自覚と使命」（ヨハネ伝15章）
２０２１年１２月２６日「クリスマスの恵み」

希望の光（聖書随想①）

２０２１年１月１０日

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面（おもて）にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。」（旧約聖書　創世記1章1～5節）

神が最初に創造されたのが「光」であったことに注目したい。台風で停電が発生し、それが3晩にも及ぶと、光の無い夜は、文字通り「暗黒」であって、耐えがたい。祈る思いで「夜明け」を待つ。主イエスが伝道に先立ち、荒野において「悪魔の試み」に勝利された後、カペナウムに来て住まわれたが、それは預言者イザヤの次のような預言の成就であるという。

「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」（新共同訳聖書　マタイによる福音書4・14～16）

私（奥田）は、主イエス・キリストによって救い上げられるまでは、「暗闇に住む民」であった。そんな私にとって、主キリストは正に大きな光となって行く道を照らすとともに、「内なる光」となって「光の子」にしてくださった。マタイ福音書に

「あなたがたは世の光である。あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。」（6・14、6・16）

とある。これは、主キリストが我が内に入って光となって輝いてくださって始めて可能となる。主キリストの言葉（命令）は、すべて、「私がお前の中に入って、させて上げるからね！」との約束の言葉である。「生の自分」で出来るものではない。それには、「生の自分」は主イエスが架かってくださった十字架上で、「主と共に死んでいること」を「恵みとして」信じ受け取ること（信受・体受）が不可欠である。ガラテヤ書2章20節の

「わたしは、キリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが（みたまのキリストが）わたしの内に生きておられるのだ。」

との自覚である。昨年来の「新型コロナウイルス」の感染拡大の状況は天地創造の際地は混沌の状況で闇が地の全面を覆っていたのに似ているように思われる。イザヤ書60章、

「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む。」（1～3節）

との預言の成就を祈りたい。わたしたちキリスト信徒は、どのような状況においても、決して希望を失わない。パウロは、ロマ書5章において、わたしたちは

「患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。希望は恥を来らせず、我らに賜ひたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。」（3～5節）

と励ましてくれている。

主キリストの賜う「自由」の中に生きる（聖書随想②）

２０２１年１月１７日

昨年来の「新型コロナウイルス」の感染拡大の状況に鑑み、京都府、大阪府、兵庫県において新年早々に「非常事態宣言」が発出され、「外出自粛」が要請されました。これを踏まえて京都キリスト召団においても、奥田の判断により、１月１７日（日）から２月７日（日）の間の「聖日集会」を休会とすることと致しました。集会員の中には、このような状況下でこそ、ひるむことなく、聖日の集会を継続するべきだとのお考えの方もいらっしゃると思いますが、「外出自粛」の要請に応ずることは、決して、「信仰の放棄（屈服）」ではなく、痛みを分かち合うことだとお考えいただきたく存じます。聖日集会での「講筵」に代えて、聖書から「御言葉」を引用することと致します。

まず、パウロの「ガラテヤ人への手紙」の５章から。

「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放してくださったのである（１節）。兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって互に仕えなさい。律法の全体は、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』というこの一句に尽きるからである（13～14節）。わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない（16節）。御霊の実は、愛、喜び、平和（フランシスコ会訳聖書では、「平安」）、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない（22～23節）」

６章では、

「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。すなわち、自分の肉にまく者は、肉から滅びを刈り取り、霊にまく者は、霊から永遠のいのちを刈り取るであろう。わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになる。だから、機会のあるごとに、だれに対しても、とくに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか（7～10節）」

と呼びかけている。以上は、「自由」の大切さについての引用ですが、日常生活において、「自由」をおびやかすものは、様々の「心配ごと」であり、そこから来る「思い煩い」です。これを克服する道は、主キリストの御言葉とそれに対する信頼です。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」

と呼びかけ（ヨハネ福音書14章1節）、

「あなたがたに言っておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。」（マタイ福音書6章25節、32～34節）

と励ましてくださっている。この約束の言葉に全托して生きるのみ。

御言葉を聴くことの飢饉（聖書随想④）

２０２１年１月31日

「主なる神は言われる、『見よ、わたしが飢饉をこの国に送る日が来る、それはパンの飢饉ではない、水に渇くのでもない、主の言葉を聞くことの飢饉である。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなた彼方へと馳せまわる、しかしこれを得ないであろう。その日には美しい乙女も、若い男も渇きのために気を失う』」（アモス書８章11～13節）。

現在の日本は、「飽食の時代」を迎えている。１９４５年の敗戦前後から数年間の食糧難の頃を知る者から見れば想像できないほどである。物質的な豊かさの故か、精神面ないし「霊の次元」での欲求ないし渇きが失われてしまっているのではないかと思われる。「渇き」の無いところには「求め」も生じない。

「さあ、渇いている者は皆、水に来れ。金の無い者も来れ。来て買い求めて食べよ。あなたがたは来て、金も出さずに、ただで葡萄酒と乳とを買い求めよ。なぜ、あなたがたは、糧にもならぬもののために金を費し、飽きることもできぬもののために労するのか。わたしによく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で自分を楽しませることができる。耳を傾け、わたしに来て聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、ダビデに約束した変らない確かな恵みを与える。見よ、わたしは彼を立てて、もろもろの民への証人とし、また、諸々の民の君とし、命令する者とした。見よ、あなたは知らない国民を招く、あなたを知らない国民は、あなたのもとに走って来る。これはあなたの神、主、イスラエルの聖者のゆえであり、主があなたに光栄を与えられたからである。

あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ、近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼に憐れみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かに赦しを与えられる。

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種蒔く者に種を与え、食べる者に糧を与える。このように、わが口から出る言葉も、空しくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことを成し、わたしが命じ送った事を果す。あなたがたは喜びをもって出てきて、安らかに導かれて行く。」（イザヤ書55章１～12節）

この箇所と響き合うように、イザヤ書35章は来るべき天国の情景を描き出しています。

「荒野と、渇いた地とは楽しみ、砂漠は喜びて花咲き、さふらんのように、さかんに花咲き、かつ喜び楽しみ、かつ歌う。彼らは主の栄光を見、われわれの神の麗しさを見る。」

今日も明日も次の日も我は進み往くべし（聖書随想⑤）

２０２１年２月８日

冒頭の御言葉は、ルカ伝13章33節からの引用です。これと響き合っているのが、ヘブル書13章８節の

「イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変り給ふことなし」

の聖句です。

「今日も明日も次の日も我は進み往くべし」

とは、何と壮んな、どんな状況の下でも「前進して止まず、前進あるのみ！」との意気込みと決意を吐露した力強い言葉でしょうか！　新型コロナとか、そのほか、わたしたちの生活を妨げる様々な出来事に翻弄されそうな今日の状況下において、

「汝ら心を騒がすな。神を信じ、また我を信ぜよ。汝ら、世にてありては患難あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり」

と勝利宣言してくださった主様を頂いているわたしたちです。使徒パウロもまた、

「キリストとその復活の力とを知り、又その死に倣ひて彼の苦しみにあづかり、如何にもして死人の中より甦へることを得んが為なり。われ既に取れり、既に全うせられたりと言ふにあらず、唯これを捉へんとて追ひ求む。キリストは之を得させんとて我を捉へたまへり。兄弟よ、われは既に捉へたりと思はず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向ひて励み、標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したまふ召にかかはる褒美を得んとて之を追ひ求む。」（ピリピ書３章10～14節）

と壮んな心中を告白しています。また、

「我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失はず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、常にイエスの死を我らの身に負ふ。これイエスの生命の我らの身にあらはれん為なり。それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらはれん為なり。」（コリント後書４章７～11節）

と。新型コロナウイルスの感染防止のために、緊急事態宣言が発出され、広く外出自粛が求められていることを考慮して、現在、集会は休会中ですが、集会員の皆様におかれましては、在宅の中で、「御言葉と祈り」の生活を貫いていただき、「我キリストと偕に」、「キリストわが内に」を実践して頂くようにお願い致します。

「神よ、汝の仁慈はたふときかな、人の子は汝の翼の蔭に避け所を得、汝の屋の豊かなるによりてことごとく飽くことを得ん、汝はその歓楽の水を彼らに飲ましめ給はん。そは生命の泉は汝に在り、我らは汝の光によりて光をみん。」

（詩篇36篇７～９節）

京都キリスト召団の会員　並びに　関係者各位

奥田昌道

緊急事態宣言が３月７日まで延長されたことを考慮して、京都キリスト召団の「聖日集会」もその間、休会と致します。

ご異論もあろうかと思いますが、集会を強行して、その間に、もしも、集会参加者のどなたかが新型コロナウイルスに感染された場合、それが集会参加とは関係無くても、集会の開催と関係づけて、召団が非難されることも起こり得ると思います。そうした事態を招かないためにも、「外出自粛」が求められている間は、休会と致したく、ご理解のほど、お願い致します。

会員の皆様におかれましては、「独立独歩」、如何なる状況、環境下にあっても、置かれた場で、「御言葉と祈り」の生活を維持していただきたく、その訓練の好機とお考えいただき、充実の日々をお過ごしなさいますよう、お願い致します。

汝、この者どもに勝りて我を愛するか？（聖書随想⑥）

２０２１年２月１４日

表題の言葉は、主キリストが復活された後、ティベリアス湖畔で弟子たちに現れて食事を共にされた後、ペテロに問いかけられた言葉です。ペテロは主イエスの弟子たちのリーダー格でした。ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人の中でも、いつも前面に出ていました。主イエスがどういうお方であるかについての応答の際に、「あなたこそ、生ける神の子、キリストです」と答えたのもペテロでした（マタイ伝16章16節）。また、五つのパンと二匹の魚を祝福して群衆に分かち与えて後、山に登り祈り込まれてから夜明けの４時頃に湖上を歩んで弟子たちに近づき、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた弟子たちに、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」との励ましの言葉に、「では、わたしに命じて、水の上を渡って御許に行かせてください」と応答し、舟から下り、水の上を歩いてイエスのところへ行ったという、離れ業をやったのもペテロでした。しかし、風を見て恐ろしくなり、溺れかけたので、「主よ、お助けください！」と叫んで助けて頂いた（マタイ伝14章13～33節）。また、最後の晩餐の後に、主イエスはペテロに次のように語りかけられた。

「シモン、シモン、見よ、サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしは、あなたの信仰が無くならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

と。これに対して、ペテロは、

「主よ、わたしは獄にでも、また死に至るまでも、あなたとご一緒に行く覚悟です」

するとイエスが言われた、

「ペテロよ、あなたに言っておく。きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう。」（ルカ伝22章31～34節）

そして、実際に、主イエスの語られた通りになった。こうした背景からすれば、主は、ペテロの人間としての弱さを十分に知りながらも、ペテロの果たすべき使命・役割をペテロに託しておられることが伺える。そこには、「私がお前を助けるから大丈夫だ、私は世の終りまで、お前と偕に居るから！」との激励と信頼の思いが込められている。

我々においても、同じだ。使命を授かる時には、同時に、御力と導き、御霊の助けが約束されている。キリスト信徒（キリストの弟子たち）は、「生来の我、肉なる我、旧き我」に死んで、「新しき我」に生きる存在である（ヨハネ伝3章、14章～16章、コロサイ書3章1～3節）。そして、どこまでも、「十字架」が土台である。「旧き我」「肉なる我」は、既に主イエスの十字架上の贖いにおいて、葬り去られている。これを、「恵み」として、100％信受・体受することだ（ガラテヤ書2章20節、エペソ書2章1～10節）。そこから、「主の祈り」を「わが祈り」として歩む日々が始まる。「肉」に播く歩みではなく、「霊」に播く歩みであって、永遠の生命を刈り取ることになる（ガラテヤ書6章8節）。

「わたしは、あなたたちを孤児にはしておかない。あなたがたのところに戻ってくる。あなたたちは、わたしを見る。わたしが生き、あなたたちも生きるからである。」（ヨハネ伝14章18～19節）。

主キリストと偕なる生涯を、と願う。

「思い煩い」からの解放（聖書随想⑦）

２０２１年２月２１日

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言ふ、なんじら喜べ。凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ。主は近し。何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡て人の思に過ぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。」（ピリピ書４章４～７節）

生来、何事につけても「思い煩い」の多い自分にとって、ピリピ書のこの言葉は、大きな慰めを与えてくれた。今もそうである。「思い煩い」とは、果たすべき責任、責務を果たしていない、という自責の念（思い）である。

「思い煩うな」との御言葉は、マタイ伝６章25節～35節に記されている。そこでは、何を食べようか、何を飲もうかとの「生命の維持・確保」に関するものや、何を着ようかとの「衣服」に関するものである。今日的に言えば、「衣食住」に関するものであり、主キリストに帰依してからの自分には、この方面の心配ごとは消え失せた。しかしながら、自分の果たすべき責任、責務を果たしていると言えるかどうかについては、今もなお、自問自答を繰り返すほかない。旧約聖書中の『詩篇』は、嘆きや讃美や祈りの思いが率直に吐露されている「魂の告白」の書であるが、その中に次のような句がある。

「もしエホバ我を助け給はざりせば、わが霊魂は、とくに幽寂ところに住まひしならん。されど、わが足すべりぬと言ひしとき、エホバよ、汝の憐憫われを支へたまへり。わがうちに思ひ煩ひの満つるとき、汝の慰めわがたましひを喜ばせたまふ。」（94篇17～19節）

「わがうちに思ひ煩ひの満つるとき、汝の慰め わがたましひを喜ばせたまふ」

とは、何と慰め深い聖句であろうか！　主イエスが弟子たちとの別れに際しての、

「汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。

「我、汝らを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば、汝らも活くべければなり。

「汝ら世に在りては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」（ヨハネ伝14章１節、18節～19節、16章33節）

の御言葉に通ずるものがある。また、ペテロ前書４章７節にも、

「もろもろの心労を神に委ねよ、神なんじらの為に慮ばかり給へばなり。」

とある。以上を総括するような励ましは、ヨハネ伝15章の御言葉である。

「我は葡萄樹、なんじらは枝なり。汝ら我に居り、我なんじらに居らば、多くの果を結ぶべし。汝ら我に居り、我が言葉なんじらに居らば、何にても望みに随ひて求めよ、さらば成らん。父の我を愛し給ひしごとく、我も汝等を愛したり。わが愛に居れ。汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。而して汝らの往きて実を結び、且つその実の残らんために汝等を立てたり。」

と。わが為すべきことの全てにつき、主キリストが責任を負ってくださっている。主キリストに「わが存在の全て」を委ねて歩むのみである。

わが祈りの友としての「詩篇」（聖書随想⑧）

２０２１年２月２８日

旧約聖書中の「詩篇」は、長年にわたって私（奥田）の「祈りの友」でありました。今もそうです。今回の「随想」では、その角度から、私の慣れ親しんできた「詩篇」の中から幾つかを記すことと致します。

「汝の聖言は わが足の燈火、わが路の光なり。」（119・105）

「聖言うち披くれば光を放ちて、愚かなる者を慧からしむ。」（119・130）

第34篇より：

「われ常に主（エホバ）を祝ひまつらん、その讃詞は我が口に絶えじ。わが霊魂は主によりて誇らん、へりくだる者は之を聞きて喜ばん。我と共に主を崇めよ、われら共にその聖名をあげたたへん。われ主を尋ねたれば主われに応へ、我を諸々の畏怖より援け出だし給へり。この苦しむもの叫びたれば主これを聴き、そのすべての患難より救ひ出したまへり。主の使者は 主を畏るる者の周囲に営を列ねて、これを援く。汝ら主の恩恵深きことを味はひ知れ、主に依り頼む者は幸ひなり。主の聖徒よ、主を畏れよ、主を畏るる者には乏しきこと無ければなり。若き獅子は乏しくして飢うることあり、されど主を尋ぬる者は嘉物に欠くることあらじ。福祉を見んがために生命をしたひ、存へんことを好む者は誰ぞや。汝の舌を押さへて悪に付かしめず、汝の唇を押さへて虚偽を言はざらしめよ。悪を離れて善を行ひ、和睦を求めて切にこのことを勉めよ。主の目は義しき者を顧み、その耳は彼らの叫びに傾く。義しき者さけびたれば主これを聴きて、そのすべての患難より援け出したまへり。主は心の傷み悲しめる者に近く在して、たましひの悔ひくずほれたる者を救ひ給ふ。義しき者は患難多し、されど主は、皆その中より援け出したまふ。主は彼がすべての骨を護りたまふ、その一つだに折らるることなし。」（以上は34篇より）

「人の歩みは主によりて定めらる、その行く道を主喜び給へり。たとひ、その人倒るることありとも、全く打ち伏せらるることなし、主かれが手を助け支へ給へばなり。我むかし年若くして今老いたれど、義しき者の棄てられ、或ひはその裔の糧乞ひ歩くを見しことなし。義しき者は終日恵みありて貸し与ふ、その裔はさひわひなり。義しき者は国を継ぎ、その中に住まひて永遠に及ばん。義しき者の口は智慧を語り、その舌は公平を述ぶ。彼が神の法はその心にあり、その歩みは一歩だに滑ることあらじ。義しき者の救は主より出づ、主は彼らが苦しみの時の砦なり。主は彼らを助け、彼らを解き放ちた

まふ、彼らは主をその避け所とすればなり。」（37篇より）

「わが霊魂は黙して ただ神を待つ、わが救は神より出づるなり。神こそは わが磐 わが救なれ、またわが高き櫓にしあれば 我いたくは動かされじ。わが救と わが栄えとは神に在り、わが力の磐 わが避け所は神に在り。民よ いかなる時にも神に依り頼め、その聖前に汝らの心を注ぎ出せ、神はわれらの避け所なり。」（62篇より）

「ああ神よ、汝は我が神なり 我せちに汝を探ね求む、水無き乾き衰へたる地にあるごとく、わが霊魂は渇きて汝を望み わが肉体は汝を恋ひ慕ふ。汝の仁慈は いのちにまさる勝れるゆえに、わが唇は 汝を讃めまつらん。かく我は わが生くる間汝を祝ひ、聖名によりて わが手をあげん。われ床にありて汝を思ひ出で、夜の更くるままに汝を深く想はん時、わが霊魂は 髄と脂とにて饗さるる如く飽くことを得、わが口は 喜びの唇をもて 汝を讃めたたへん。そは汝 わが助けとなり給ひたれば、我 汝の翼のかげに入りて 喜び楽しまん。わが霊魂は汝を慕ひ追ふ、右の聖手は 我を支ふるなり。」（63篇より）

「ああ主よ、我 深き淵より汝を呼べり。主よ、願はくは わが声を聴き、汝の耳を わが懇求の声に傾けたまへ。主よ、汝もし 諸々の不義に目を止め給はば、誰か よく立つところを得んや。されど 汝に赦しあれば、人におそれ畏まれ給ふべし。我 主を待ち望む、わが霊魂は待ち望む、我は その聖言によりて望みを抱く。わが霊魂は衛士が あしたを待つにまさり、誠に衛士が あしたを待つにまさりて 主を待てり。イスラエルよ、主によりて望みを抱け、そは主に憐憫あり、また豊かなる救贖あり。主は、イスラエルを その諸々の邪曲より贖ひたまはん。」（130篇）

詩篇の中でも、圧巻は103篇と139篇です。103篇は、旧約の中の「福音」と言われる内容で、イザヤ書40章以下を想い起させます。139篇は、神（キリスト）の我々に対する「絶対愛」に貫かれた素晴らしいものです。また、詩篇の終りの方は、「神讃美」に溢れた素晴らしいものです。

皆さまも、詩篇を祈りの友として、愛読して頂き、日々の歩みの中で、慰め、励まし、力を頂かれ、「主キリストと偕なる生活」の一助として頂ければ、幸いです。

（２０２１年２月28日、妻・幸子の旅立ちの９周年記念の日に、奥田昌道）

２０２１年　復活節集会　ご案内

２０２１年３月８日

ようやく春めいてまいりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

1月半ばから休会としていた京都の聖日集会は、3月7日(日)から再開しました。しかし、まだ、感染防止措置が必要であり、多人数での集会は慎重に行う必要があります。

そこで、今年の復活節集会は、下記のとおり、講筵を中心とした午前だけの集会と致します。皆様には、体調・発熱の有無等を勘案いただき、無理のない範囲で御参加ください。なお、会場ではマスクを着用し、席も間隔を空けて着席をお願いする所存です。昼食は致しません。

主は、ラザロの姉妹マルタに、

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか。」

と言われました。私たちも復活節講筵により、主の御復活の生命(いのち)をしっかり受け取りたいと思います。

記

日　時　4月4日（日）　10時15分～12時

会　場　KKR　京都くに荘　4階比叡の間（上京区河原町通り荒神口上る東入る）

Tel.　075-222-0092

会　費　無料（会場費等は、すべて京都キリスト召団で負担いたします）

講　筵　10時15分～11時45分　奥田昌道先生

解　散　12時00分

参加希望の方は、会場設営の関係上、3月27日（土）までに、連絡先あて、電話、郵便又はメールで参加者名をお知らせください。

詩篇103篇（旧約の福音）：「罪」と「死」から「生命」へ

２０２１年３月14日

「わが魂よ、主をほめよ。わがうちなる すべてのものよ、その聖なる 御名をほめよ。わが魂よ、主をほめよ。その すべての恵みを心にとめよ。主は あなたの すべての不義をゆるし、あなたの すべての病をいやし、あなたのいのちを墓から あがないいだし、いつくしみと あわれみとを あなたにこうむらせ、あなたの 生き長らえるかぎり、良き物をもって あなたを飽き足らせられる。こうして あなたは 若返って、鷲のように新たになる。」（口語訳　103篇1～5節）

ここまで読むと、思い出すのは、「慰めよ、わが民を慰めよ」で始まるイザヤ書40章以下です。

「ヤコブよ、何ゆえ あなたは、『わが道は主に隠れている』と言うか。イスラエルよ、何ゆえ あなたは、『わが訴えは わが神に顧みられない』と言うか。あなたは 知らなかったか、あなたは 聞かなかったか。主は とこしえの神、地の果ての創造者であって、弱ることなく、また疲れることなく、その知恵は はかりがたい。弱った者には力を与え、勢いのない者には強さを増し加えられる。年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。しかし 主を待ち望む者は 新たなる力を得、鷲のように翼を張って、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない。」（40章27～31節）

「わが しもべ イスラエルよ、わたしの選んだヤコブ、わが友アブラハムの子孫よ、わたしは地の果てから、あなたを連れて来、地のすみずみから、あなたを召して、あなたに言った、『あなたは、わたしの しもべ、わたしは、あなたを選んで捨てなかった』と。恐れてはならない、わたしは あなたと共にいる。驚いてはならない、わたしは あなたの神である。わたしは あなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたを支える。（中略）あなたの神、主なる わたしは あなたの右の手をとって あなたに言う、『恐れてはならない、わたしは あなたを助ける』。主は言われる、『虫に ひとしいヤコブよ、イスラエルの人々よ、恐れてはならない。わたしは あなたを助ける。あなたを あがなう者は イスラエルの聖者である。」（41章8～14節）

詩篇103篇に戻りますと、

「主は われらの罪にしたがって われらを あしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。天が地より高いように、主が おのれを畏れる者に賜わる 慈しみは大きい、東が西から遠いように、主は われらの咎を われらから遠ざけられる。主の慈しみは 永久から永久まで、主を畏れる者の上にあり、その義は 子らの子に及び……」

と続きます。「神讃美、キリスト讃美の人生」でありたいです。

主、知り給う――詩篇139篇ほか――

２０２１年３月21日
奥田昌道

詩篇139篇、

「主よ、汝は我をさぐり、我を知り給へり。
汝は前より後より我を囲み、わが上にその聖手を置き給へり。
神よ、汝の諸々の聖念(みおもい)は、我に貴きこと 如何ばかりぞや、
その聖念の総計(すべくくり)は いかに多きかな。」

マタイ伝11章25～30節、ルカ伝10章21～22節、

「天地の主なる父よ、われ感謝す。此等(これら)のことを智(かしこ)き者、慧(さと)き者に隠して、
嬰児(みどりご)に顕し給へり。子を知る者は父の外になく、父を知る者は、子また子の
欲するままに顕すところの者の外になし。」

ヨハネ伝10章14～18節、27～30節（善き牧者とその羊）。

詩篇130篇、

「ああ主よ、われ深き淵より汝を呼べり。
汝、若(もし)諸々の不義に目を止め給はば、誰か よく立つことを得んや。
されど、汝に赦しあれば、人におそれ畏まれ給ふべし。」

（解説）神（主）が私達を知り給う知り方は、罪過を見つけて裁くためではなく、深い慈しみと同情の御思いをもって、担い、慰め、励ますためである。福音書に見られる主イエス・キリストの言葉や行動に、そのことが良く表れている。収税所に坐していたマタイを弟子として召された場面（マタイ伝9章9～13節）がその良い例である。

ヨハネ伝8章1～11節（地に物書き給うイエス）の場面もそうである。

主イエスの「赦し」の背後には、ご自分が人々の罪を背負うという深い愛（それが十字架上での贖罪死となった）が隠されていた。上記の詩篇130篇の「赦し」を十字架において体現してくださった。主イエスにおいては、「父と子」という信愛の関係と、「主と僕」という使命的関係が、神に対する「在り方」において融合していた。

私（奥田）においては、「赦し」のみならず「永遠の生命」までも賜わった事に対して「主の僕」としての使命を果たすことによって、「ご恩返し」をしたいと願っている。

主キリストの「憐憫」と「愛」

２０２１年３月28日

「恵福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん」（マタイ5・7）

放蕩息子に対する父親の姿：

「父、これを見て憐れみ」（ルカ15・20）

王（主人）と負債ある家来（僕）：

「7度の70倍まで」（マタイ18・21～35）

ヤコブ書2・12～13：

「憐憫を行はぬ者は憐憫なき審判を受けん、憐憫は審判にむかひて勝ち誇るなり。」

憐憫（同情）は、共に苦しみ、苦しみを分かち合い、共感して慰め、励ますことまでは出来ても、それ以上のことは出来ない。罪の問題においては、他人が代わってその償い（贖罪）をすることは出来ないし、それが刑事法上の犯罪ならば、許されていない。

主イエスが生きられた旧約の時代、モーセの十戒をはじめとする様々な律法の下で、その厳格な順守と違反に対する厳しい処罰を旨とするパリサイ派に対して、主イエスは「罪のゆるし」の福音を説かれた。その顕著な例は、姦淫の女を許された場面（ヨハネ8・1～11）やマタイの召命の後の食事の席でのイエスの言葉、

「健やかなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。なんじら往きて学べ『われ憐憫を好みて、犠牲を好まず』とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来れり」

との言葉に見ることが出来る。

人間の病や苦しみ、霊・肉一如の全き救いの約束は、イザヤ書44・21～23、46・3～4、48・17～19、53（全）、57・15～19、61・1～3において示されているが、以下には、63・7～9を引用する。

「わたしは主がわれわれになされたすべてのことによって、主の慈しみと、主の誉とを語り告げ、また、そのあわれみにより、その多くのいつくしみによって、イスラエルの家に施されたその大いなる恵みを語り告げよう。主は言われた、『まことに彼らはわが民、偽りのない子らである』と。そして主は彼らの救主となられた。彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、そのみ前の使をもって彼らを救い、その愛とあわれみとによって彼らをあがない、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた。」

主イエスにおいては、憐憫（同情）は「担いの愛」となり、「罪のあがない」としての「十字架の愛」へと転化した。罪の赦しのみならず、永遠の生命を賜った。

復活節集会　講筵レジュメ

２０２１年４月４日

Ⅰ　福音書における「死人の甦り」は、「死」からの「生還」（陰府からの帰還）の事態であった。現象としては、「奇跡」と言うべき事態ではあるが、再び与えられた生命（いのち）は、元の生命と同質・同次元の生命であった。

①墓の中から蘇生したラザロ（ヨハネ伝11章44節）。

②会堂司ヤイロの娘（マルコ伝5章21～43節、41～42節『タリタ、クミ』）

③ナインの町の寡婦の独り息子の葬儀の列に接して、棺に手を触れ、『若者よ、起きなさい』と声をかけて、若者を蘇生させられた出来事（ルカ伝7章11～17節）。

Ⅱ　イエスの甦りは、これらとは全く異なる異次元の事態であり、「霊体」としての顕現であった。

①エマオへ向う二人の弟子に旅人の姿で顕現したイエス（ルカ伝24章13～35節）。

②エマオへの旅路から戻った二人を囲む十一弟子たちに顕現したイエス（ルカ伝24章33～49節）。

③マグダラのマリヤに顕現したイエス：『マリヤよ』『ラボニ』（ヨハネ伝20章1～18節）。

④同日の夕べ、弟子たちに顕現したイエスと、その時不在だったトマスに8日後に顕現し、『見ずして信ずる者は幸福（さいわい）』と諭されたイエス（ヨハネ伝20章19～29節）。

⑤ペテロや他の弟子たちが夜、漁に出かけたが不漁に終った夜明け方、岸辺に立って指示を与えたところ、それに従った弟子たちが大漁に恵まれた。弟子たちは、指示を与えた方がイエスだと知ったが、誰も問いただすことはしなかった。これが甦られたイエスの3度目の顕現であった（ヨハネ伝21章1～14節）

Ⅲ　私達、主イエスに帰依する者は、地上での生涯を終えた後、復活された主イエスと同じ「霊体」を賜って、主イエスの居られる天界に生き続けるものと、私（奥田）は確信している。そのことを、主イエスはヨハネ伝福音書において、繰り返し語っておられる。

①『はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださったからである。』（ヨハネ伝5章24～26節）

②『わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。わたしをお遣わしになっ

た方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終りの日に復活させることだからである。『（ヨハネ伝6章38～40節）

③ヨハネ伝11章：マルタとマリヤの兄弟ラザロを甦らされた事態（ヨハネ伝11章1～44節）、その際に語られた言葉、

「『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。』天を仰いで父なる神に祈られた後、大声で『ラザロ、出て来なさい』と叫ばれると、手と足を布で巻かれたままのラザロが出て来た」（11章41～44節）。

イエスがラザロを蘇生させられたのは、イエスを信受する者は、地上の生命の終りである「死」でもって、その「命（いのち）」が終るのではなく、別次元の命（「永遠の生命」）を賜って、天界（天の次元、神・キリストの臨在されている「永遠界」）に生き続けることを示すためであった。イエス御自身は、本来は、「死」を味わうことなく、直ちに天界に帰るにふさわしい方であるにもかかわらず、我々「罪人」の罪（我執の罪、自己愛、エゴイズム）を引き受けて十字架に架かってくださった。パウロは、このことを、ロマ書（ローマの信徒への手紙）5章において、次のように述べている。

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人（つみびと）であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」（6～8節）

イエス御自身の本来の姿は、あの「山上での変貌」（マタイ伝17章1～8節、マルコ伝9章2～8節、ルカ伝9章28～36節）において示されている。祈れば、まばゆい姿に変貌して、そのまま天界に飛翔されるにふさわしい方が、あの無残な十字架上での死を遂げられたことにおいて、我々「罪びと」の「罪」は完全に贖われ、あるがままの我々が、そのまま、「天国人（天界に生きる者）」とされたのである。この事態をパウロは、

「わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。わたしは、神の恵みを無にはしません。」（ガラテヤの信徒への手紙2章19～21節）

と告白している。また、テモテ後書（テモテへの手紙二）1章9～10節において、

「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、今や、わたしたちの救い主キリスト・イエスの出現によって明らかにされたものです。キリストは、死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現してくださいました。」

と述べている。

Ⅳ　地上の生を終えた後の私達の「存在形態」について、パウロは、「コリント信徒への手紙　一」の15章35節以下において、「復活の体」に関して次のように語っている。

「蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。（中略）自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。最初の人は土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。」（42～49節）

「わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。……死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。……この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。」（51～53節）

と。また、「コリント信徒への手紙　二」の４章16～18節において、「外なる人」は衰えていくとしても、「内なる人」は日々に新たにされて行くことを述べている。そして第５章においては、死後の「永遠の住みか」（霊体）が備えられていることを語っている。

パウロが啓示されたこれらの事態は、すべて、主イエス・キリストが私達のために、御自身の十字架における贖罪の御業によって、わたしたちにもたらしてくださったものである。このことを信受する者は、パウロと共に、

「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。わたしは、神の恵みを無にはしません。」（ガラテヤの信徒への手紙２章19～21節）

と告白して、主キリストへの「報恩」の生涯を送りたいと願わないではおられない。

復活節集会への感謝と伝道の使命

２０２１年４月11日
奥田昌道

付・京都キリスト召団への励ましの書簡・ピリピ書（その１）

Ⅰ　復活節集会への感謝――予想を上回る来会者と初参加者を得たこと。

Ⅱ　伝道の使命（召団として、個人として）。

１　ローマ信徒への手紙（ロマ書）10章８～13節　信仰による義と救い（９節）。

２　同　10章14～17節　信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである。

「ああ麗しいかな、良きおとづれ（福音）を告げる者の足は」（15節）

Ⅲ　ピリピ書の背景――使徒言行録16章。

９節：パウロの見た幻→ルデヤとの出会い→パウロとシラスの受難→獄中の祈りと大地震の発生→看守の自害未遂→看守と家族の救い→高官に対する毅然たるパウロの態度

Ⅳ　ピリピ書の特質：

①ピリピの集会（教会）が、ルデヤという一人の女性信徒とパウロ、シラスとの出会いから始まったこと、

②ピリピの集会（教会）がパウロと堅い信愛の絆で結ばれていたこと（１章８節、４章10節、４章15～16節）。

京都キリスト召団もまた、奥田という一人の信徒の伝道の志から始まった。奥田はピリピにおけるルデヤのような存在だと言えよう。そして、京都キリスト召団は、単立のいと小さき、信徒の群れである。ピリピ書は、この「いと小さき群れ」に対する熱い励ましの書簡だと言える。その実践的な奨めが第４章４～７節である。

わが生くるはキリスト（ピリピ書　第２回）

２０２１年４月18日
奥田昌道

先週の聖日集会（４月11日）の「講筵メモ」において、ピリピ書は、「いと小さき群れ」である京都キリスト召団に対する「熱い励ましの書簡」であると書いた。

今回は、同書簡の中から、パウロの熱い思いと祈りを受け取りたい。（第１章・第２章）

①「我は汝らの衷に善き業を始め給ひし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信す。……我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟りとによりて弥が上にも増し加はり、善悪を弁へ知り、キリストの日に至るまで潔くして躓くことなく、イエス・キリストによる義の果を充して、神の栄光と誉とを顕さん事を。」（１章６～11節）

②「これは我が何事をも恥じずして、今も常のごとく聊かも臆することなく、生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給はんことを切に願ひ、また望むところに適へるなり。我にとりて、生くるはキリストなり。死ぬるもまた益なり。」（同・20～21節）

③「汝等ただキリストの福音に相応しく日を過せ、……」（１章27～30節）。

④　第２章（全）：

「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。……なんじら呟かず疑はずして、凡ての事をおこなへ。人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。されどテモテの練達なるは汝らの知る所なり。」

（感想）イエス・キリストに敵対する当時の宗教的権力者たちによって、迫害され、囚われの身となったパウロが、

「聊かも臆することなく、生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給はんことを切に願ひ、」

「我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」

と告白するパウロの心情に心打たれる。

信教の自由が保障されている現代において、わたしたちは、どれほどの真剣さと情熱をもって、主キリストの福音を伝えることに力を注いでいるだろうか？

宣教の原動力は集会と個人に「聖霊の火」が燃えていることである。

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。」

との主キリストの御思いを大切にしたい。

「聖書講筵」に代えて

２０２１年５月２日
奥田昌道

「緊急事態宣言」による「外出自粛」のため、聖日集会を休会としています。そこで、皆様に聖日を有意義に過ごして頂くための補助手段として、以下のような提案を致します。

各自、聖書を開かないで、心に浮かぶ「キリストの言葉、使徒書簡の中の言葉、詩篇やイザヤ書、エレミヤ書ほかの預言書や、旧約聖書の中の言葉」を書き出して見る。

要は、新約聖書からと、旧約聖書では「詩篇」とその他の日頃親しんでいる書からの言葉を書き出すことです。

新約聖書にしても、時代は２０００年前がその舞台です。社会制度や人間を取り巻く環境も、現代の日本とは著しく異なるはずです。その中での主キリストの言・行や使徒たちの言葉が、わたしたちの胸を打つのは、「奇跡」と言ってよいと思います。

私達は、時代や社会・経済的環境の隔たりにも拘わらず、なお、真実性を保持し続けている内実（本質的なもの）をしっかりと受け取りたいと願います。

その際、大切な事は、主キリストは、今も、「霊なるキリスト（みたまの主キリスト）」として、活きて働いてくださっていること、その方は、わたしたちの全存在を十字架で完全にあがなってくださり、引き受けてくださっていることを全的に信受することです。

使徒パウロの、

「わたしは主と共に十字架につけられた。生きているのは最早、旧い自分ではない、復活して今も生きて働いてくださっている『みたまの主キリスト』が、わたしの中で生きて働いてくださっているのである」

とのガラテヤ書2章20節の告白を、わが告白とすることです。

私（奥田）は、皆さまのお一人、お一人が、「主キリスト直結」の信仰の事態を生きていただくこと、様々の困難な事態も、そのための「修練の場」だと受け止めて、強く、雄々しく在って頂くことを願っています。

「汝ら世に在りては患難（艱難、悩み）あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり」

との主キリストの言葉、また、

「汝らが遭ひし試練（こころみ）は人の常ならぬはなし。神は真実（まこと）なれば、汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試練に遭はせ給はず。汝らが試練を耐へ忍ぶことを得んがために之と共に遁るべき道を備へ給はん」（コリント前書10章13節）

とのパウロの言葉を支えとし、励ましとして頂きたく願います。

「恵みの65年」への感謝

２０２１年７月４日
奥田昌道

Ⅰ　私を支えてくれた聖句：
思い煩いからの解放
（１）マタイ伝６章５～31節
（２）旧約聖書　箴言３章１～12節
Ⅱ　生きる勇気と慰めと希望（現在の心境）
（１）詩篇103偏
（２）詩篇127偏、128偏
（３）詩篇130偏
文語訳聖書で「エホバ」とあるのは、「主」と読み替える。
「言」とは、「イエス・キリスト」とその背後に在す「父なる神」を指す。

「永遠の生命」を生きる

２０２１年７月11日
奥田昌道

聖句：

①「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛してくださった。それは御意を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。」（ヨハネ伝福音書3章16～17節）。

なお、18～21節も。

②『永遠の命とは、唯一のまことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。』（ヨハネ伝17・3）

③ヨハネ伝14章18～21節。

〝肉〟の次元と〝霊〟の次元、現象界と根源界

①『神は霊なれば、拝する者も霊と真（まこと）とをもて拝すべきなり』（ヨハネ4・24）

②『だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない。……神の国にはいることはできない。肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である。……』（ヨハネ3・1～6）

③『人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊でありまた命である。』（ヨハネ6・63）

④ローマ書8章1～17節

⑤コロサイ書3章1～4節

⑥ガラテヤ書2章20節

京都くに荘での　聖日集会のご案内

２０２１年７月２３日

梅雨明けとともに、一気に夏空となりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

本来なら、夏季福音特別集会の案内を差し上げたいところですが、新型コロナウイルスの感染が続いており、多人数での集会を開くことができません。一方、奥田先生の御講筵を直接拝聴し、あわせて兄弟姉妹と祈りを共にしたいとの声が多く寄せられています。

そこで、感染防止のため会場を広く取り、下記のとおり講筵と祈りを中心とした午前だけの聖日集会を開きます。皆様には、体調・発熱の有無等を勘案いただき、無理のない範囲で御参加くださるとうれしく思います。なお、会場ではマスクを着用し、席も間隔を空けて着席をお願いする所存です。昼食は致しません。

「すべて此の水を飲む者は、また渇かん。されど我が与ふる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし。」（ヨハネ伝４章13、14節）

私たちもこの講筵により、主からの「活ける水」を心いっぱいいただきましょう。

記

日　時　8月29日（日）　10時15分～12時

会　場　KKR京都くに荘　４階比叡の間

（上京区河原町通り荒神口上る東入る）Tel.075-222-0092

会　費　無料（会場費等は、すべて京都キリスト召団で負担いたします。）

日　程

講　筵　10時30分～11時45分　奥田昌道先生

解　散　12時00分

参加希望の方は、会場設営の関係上、8月21日（土）までに、連絡先あて、電話、郵便又はメールで参加者名をお知らせください。

キリストと共なる生活
――みことば（聖霊）を生きる、キリストを生きる――

２０２１年７月25日
奥田昌道

猛暑と新型コロナウイルスの感染拡大の脅威の中での日常生活において、私たちの全生活（霊と心と体）を支え、護り、導いてくださるのは主キリスト（みたまのキリスト）です。

みたまのキリストは、私たちがどんな艱難や試練の中にあっても、それに打ち勝つ力を与え、道を拓き、乗り越えさせてくださいます。主キリストご自身の負われた「十字架」において、私たち一人ひとりの全生活（全存在）が担われ、護られ、支えられています。

それを最も良く表しているのが、ヨハネ福音書14章16節から20節や、同16章31節から33節の主キリストの約束であり、コリント後書4章7節から18節の使徒パウロの告白です。

また、私たちの霊の次元の相（すがた）と、それを踏まえての現実の生活の在り方を示しているのが、コロサイ書3章1節から17節です。

私たちの集会の拠り所となる聖句は、マタイ伝18章18節から20節およびルカ伝12章32節の主キリスの御約束です。

一人ひとりの「主に在る生活」の指針となるのは、ピリピ4章4節から8節のパウロのすすめです。パウロは、10節から13節において、「一切の秘訣」を得たと告白しています。コリント後書11章23節から29節、同12章10節に述べられている艱難辛苦を思えば、私たちは、どんな境遇に陥っても、それを克服してゆく力を賜ることと確信します。

各自が「神の子」としての自覚を！

２０２１年８月８日
奥田昌道

Ⅰ　世界の年号は、大きくは「紀元前」と「紀元後」に分けられています。即ち、キリスト誕生前を「紀元前」、その後を「紀元後」と呼んでいます。我が国の歴史における一つの大きな区分としては、１９４５年（昭和20年）８月15日（終戦の日）を境とする「戦前」と「戦後」の区分です。

それでは、各人の人生において「～前」と「～後」を分ける事態は何でしょうか？　奥田にとっては、「キリストに出会って頂いた事」（１９５６年７月７日の夜）が最も重要な出来事です。この時を境として、私の人生は、「闇から光へ」、「死から命へ」、「自己責任から主キリストが担い給うキリスト責任へ」と転換しました。そのことは、その後の様々の苦しい体験を通して次第に明らかになって行きました。

はっきり申し上げておきたいのは、キリストを信じて歩む道は、決して平坦な楽な道ではないこと、いわゆる「御利益信仰」とは異なることです。

使徒パウロは、ロマ書８章14節以下において、

「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である」

と言い、子であるからには

「神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている」

と述べています。また、コリント後書４章７節において、

「わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである」

と述べ、どのような困難な事態に遭遇しても決して屈しない生き方を告白しています（８～18節）。

Ⅱ　善き牧者キリスト（ヨハネ伝10章、イザヤ書53章）

Ⅲ　我らは既に「神の子」である（ヨハネの第一の手紙３章）

恵信一如

――恩恵（恵み）により、信仰により（エペソ書第２章）――

２０２１年９月12日
奥田昌道

聖句：

① 録して『神の おのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり』と有るが如し。されど我らには 神 これを御霊によりて顕し給へり。御霊は すべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。（コリント前書２章９～10節）

② 汝らは 恩恵（恵み）により、信仰によりて 救はれたり、是 おのれに出るにあらず、神の賜物なり。行為（おこない）に出るにあらず、これ 誇る者の なからん為なり。我らは 神に造られたる者にして、神の 預じめ備へ給ひし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり。（エペソ書２章８～10節）

③ 我 キリストと偕に十字架につけられたり。最早 われ 生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今 われ 肉体に在りて生くるは、我を愛して 我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに出りて 生くるなり。（ガラテヤ書２章20節）

④ それ 十字架の言（ことば）は 亡ぶる者には愚（おろか）なれど、救はるる我らには神の能力（ちから）なり。（コリント前書１章18節）

以上の聖句からも、我々の「救い」（我執の罪から解放し、永遠の生命を頂いて生きる）は、天地創造の御業の中で用意されていたことが分かる。そのことを、エペソ書第１章３～14節が高らかに謳っている。主役は神御自身であり、御子キリストが父なる神の聖意を体して、救いの御業を全うしてくださった（聖意体現）のである。即ち、十字架上の死による「罪の贖い（ゆるし）」と「旧き我（自我）の死」、御復活と聖霊を賜うことによる「永遠の生命（新生命）の賦与」という恵みの御業を全うしてくださったのである。上記③のパウロの告白が、そのことを明らかに宣言してくれているのである。

我々の生涯が、神讃美、キリスト讃美と感謝に満ちて、御意（みこころ）を体現するものでありたいと願う。

霊戦

２０２１年９月19日

聖句：

①「**イエス 彼らに言ひ給ふ『……視よ、われ汝らに……仇の凡ての力を抑ふる権威を授けたれば、汝らを害ふもの断えてなからん。されど霊の汝らに服するを喜ぶな、汝らの名の天に録されたるを 喜べ』**」（ルカ伝10章19～20節）

② 荒野の試み（サタンとの戦い）において、主イエスは、神の言葉を武器として戦い、サタンを撃退した。ルターは、サタンに対して、「十字架」を武器として戦った。パウロは、

「**それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救はるる我らには神の能力なり。**」

と告白している。「十字架の言」とは、「十字架という事実」、即ち、キリストが十字架に架かってくださったと云う事実が語っている事態（内実）を指す。

キリストの十字架の贖い（贖罪）は、実に、私のためのものであったと、無条件に信受、体受する者にとっては、その者を救い上げる神の力であるということ。

③ 我々のこの世での戦いは、

「**血肉に対するものではなく、闇の世の主権者（サタン）に対する戦い（霊戦）**」

である。だから、エペソ書6章10節以下に書かれているように、神の武具を身に体して立ち向かわなければ、危ない。人間的な力ではダメである。

「肉」の力ではなく「霊」の力、即ち、聖霊の賜う力でなければ、負けてしまう。

そのためには、絶えず、自分（生来の我）が十字架上のキリストの死と一つとされて、

「**我、主キリストと偕に十字架に付けられたり。故に、最早、旧き我、生来の我は生きていない。御霊のキリストが私の中に宿って、生きてくださっている**」

とのパウロの告白を身に体して貫くことが肝要である。その上で、

「**誠、正義、平和の福音の備え、信仰という盾、御霊の剣、即ち、神の言葉（聖書にあるキリストの言葉や使徒たちの言葉）、聖霊に導かれての祈り**」（神の武具）

を身につける」

ことが求められている。

④ 主キリストによる救いに与った後の霊的生活の大切さ。

マタイ伝12章43～45節、ルカ伝11章24～26節の主イエスの御言葉は、キリストの救いを賜った者が、心すべき大切なことである。賜った救いに安住することなく、常に主の御心（何を願い、求めておられるか）に留意して、「聖意体現者」であるように心がけたい。「十字架と聖霊」を土台とした祈りと実践の生活でありたい。

ピリピ書より

２０２１年９月26日

①「我は汝らの衷に善き業を始め給ひし者の、キリスト・イエスの日まで之を全うし給ふべきことを確信す。」（1・6）

②「我は祈る、汝らの愛、知識ともろもろの悟りとによりて弥が上にも増し加はり、善悪を弁へ知り、キリストの日に至るまで潔くして躓くことなく、イエス・キリストによる義の果を充して、神の栄光と誉とを顕さん事を。」（1・9〜11）

③「これは 我が何事をも恥じずして、今も常の如く聊かも臆することなく、生くるにも死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給はんことを切に願ひ、また望むところに適へるなり。我にとりて、生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり。」（1・20〜21）

④「汝等ただキリストの福音に相応しく日を過せ、さらば我が往きて汝らを見るも、離れいて汝らの事をきくも、汝らが霊を一つにして堅く立ち、心を一つにして福音の信仰のために共に戦ひ、凡ての事において逆ふ者に驚かされぬを知ることを得ん。その驚かされぬは、彼らには亡びの兆、なんじらには救の兆にて、此は神より出づるなり。汝等はキリストのために只に彼を信ずる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜はりたればなり。」（1・12〜19）

⑤「この故に若しキリストによる勧、愛による慰安、御霊の交際、また憐憫と慈悲とあらば、なんじら念を同じうし、愛を同じうし、心を合せ、思ふことを一つにして、我が喜悦を充しめよ。何事にまれ、徒党また虚栄のためにすな、おのおの謙遜をもて互に人を己に勝れりとせよ。おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の貌にて居たまひしが、神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反って己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。既に人の状にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給へり。この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜ひたり。」（2・1〜9）

⑥「神は御意を成さんために汝らの衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業を行はしめ給へばなり。なんじら呟かず疑はずして、凡ての事をおこなへ。是なんじら責むべき所なく素直にして、此の曲れる邪悪なる時代に在りて神の疵なき子とならん為なり。汝らは生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。」（2・13〜15）

⑦「人は皆、イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む。」（2・21）

⑧　3・5〜16、⑨　3・18〜21、⑩　4・4〜9、⑪　4・11〜13

天国人として生きる

２０２１年10月３日

聖句：

①「イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の国を見ること能はず。……人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能はず、肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。……風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処(いずこ)より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者も斯くのごとし』」（ヨハネ伝３章３～８節）

②「『活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、生命なり』」（ヨハネ伝６章63節）

③「『神は霊なれば、拝する者も霊と眞(まこと)とをもて拝すべきなり』」（ヨハネ伝４章24節）

④「我キリストと偕に十字架につけられたり、最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」（ガラテヤ書２章20節）

⑤「答へて言ひ給ふ『「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」と録されたり』」（マタイ伝４章４節）

⑥「イエス言ひ給ふ『われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渇くことなからん』」（ヨハネ伝６章35節）

解説。上記の①②のほか、聖書で「霊」と「肉」とが対比して用いられる場合(ロマ書８章でも)、霊と肉は、「霊魂」と「肉体」ということではなく、人間の在り方の対比であって、「肉」は、生来の「自己中心的な在り方」、「霊」は、主キリストが生きられたような「神中心的な在り方」を指している。生来の自己中心的な在り方（肉）のままでは、いかに修業や修養によって自己の変革、向上を図ろうとも、真に「霊」的な在り方を貫く事は困難あるいは不可能だと言っても良い。主キリストの「十字架上の我が為の贖罪死」を全存在的に信受・体受する事によってのみ、真に「霊の人」としての生き方が可能となる（奥田においては、そうである）。上記④のパウロの告白を我が告白としたい。

「天国人」とは主キリストの十字架上の死を「我が為の贖罪死」として信受・体受し、最早、生来の旧き我（自己中心の肉なる我）は主の十字架上の死において葬り去られ、新しい生命を頂いて、聖霊（御霊のキリスト）の導きと護りの中で生きる者の事だと自覚している。「主キリストさま、貴神(あなた)の御心、御意に即して生きることが出来ますように、どうぞ、お導きください！」との祈りに生きる者である。

天国人の特権と責務

――祈りたる事は、既に叶えられたりとせよ――

２０２１年10月10日

「イエスは答えて言われた、『神を信じなさい。よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中に入れと言い、その言った事は必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、その通りに成るであろう。そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、既に叶えられたと信じなさい。そうすれば、その通りになるであろう。また立って祈るとき、誰かに対して、何か恨み事があるならば、ゆるしてやりなさい。そうすれば、天にいますあなたがたの父も、あなたがたのあやまちを、ゆるしてくださるであろう。』」（マルコ伝福音書11章22～25節）

わたしたち、キリスト信徒の特権は、どんなに困難な状況の下でも、主キリストに祈り、状況を打開し、闇から光へ、絶望から希望へと道を開いてくださる事を信じて祈り求めることが許されている、そして、祈った事、願い求めた事に対しては、主キリストは必ず応答してくださるという事です。使徒パウロは、主キリストという宝を「土の器」である自分の中に頂いていると言い、

「その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、顕れる為である」

と言い、

「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスの命が、この身に現れるためである。」

と宣言しています。（コリント人への第二の手紙４章７～10節）

京都キリスト召団という「祈りの群れ」を生み出してくださったのは、主キリスト御自身です。主より託された使命・任務を果たすべき、責任と特権を賜っています。わたしたちは、現在の世の流れや風潮とは、およそかけ離れた存在、「絶滅危惧種」かもしれません。しかし、わたしたちにとって最も大切な事は、主キリストが何を願っておられるか、如何なる使命を託しておられるか、ということです。それをしっかりと自覚し、使命を果たすのに必要な力を賜るように、心を一つにして祈り求めて行くならば、主キリストは必ずそれにお応えくださるはずです。

天国人としての特権と希望

２０２１年10月17日

前回（10月10日）には、「天国人の特権と責務」と題して、わたしたち、キリスト信徒の特権は、どんな困難な状況の下でも、状況を打開してくださるようにと祈ることが許されており、祈った事、願い求めた事に対しては、主キリストは必ず応答してくださることであると述べました。

「天国人」とは、主キリストにより「天国を賜っている者」のことです。主キリストも、

「こころの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである。」

と語られました。（「こころの貧しい人」とは、「自分を何者ともしない者」、「自分に依り頼む事の出来ない者」のことです）。では、「天国人としての希望」とは何でしょうか？　私が「希望」と言うとき、それは「願望」とは違います。「願望」は人間の側からの「願い事」に過ぎませんが、「希望」は神・キリストから賜るものです。だから必ず実現するのです。使徒パウロは、「ローマ人への手紙」第5章において、わたしたちは、主イエス・キリストにより

「神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛が わたしたちの心に注がれているからである。」（2～5節）

と述べています。また、「愛の讃歌」として有名な「コリント前書13章」の13節では、

「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。」

とされています。

ヨハネの第一の手紙第3章では、

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。……しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼（イエス・キリスト）が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似る者となることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。」（1～2節）

とあります。また、ピリピ人への手紙第3章では、

「わたしたちの国籍は天にある。そこから、救い主、主イエス・キリストの来られるのを、わたしたちは待ち望んでいる。彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しい からだを、ご自身の栄光の からだと同じかたちに変えてくださるであろう。」

と語られています。私（奥田）は、これらの「み言葉」を、100％そのまま、受け取っています。これらの「み言葉」を支えとすることが出来る人生は、「外なる人」はどんなに破れていても、「内なる人」は「日ごとに新しくされて」いく「勝利の人生」であります。

生命（いのち）の真清水を飲む

２０２１年10月24日

ヨハネ伝第４章では、真昼時、旅に疲れてサマリヤのスカルという町のヤコブの井戸のそばに座っておられたイエスとサマリヤの女との対話の場面が描かれています。その中でイエスは、

「この（井戸の）水を飲む者は誰でも、また渇くであろう。しかし、私が与える水を飲む者は、いつまでも、渇くことがないばかりか、私が与える水は、その人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧きあがるであろう。」（14節）

と語られました。このみ言葉はイザヤ書55章の預言の成就と言えると思います。そこでは、

「さあ、渇いている者は 皆 水に来たれ。金の無い者も来たれ。……なぜ、あなたがたは、糧にもならぬもののために金を費やし、飽きることもできぬものために労するのか。私によく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で、自分を楽しませることができる。耳を傾け、私に来て聞け。そうすれば、あなたがたは、生きることが出来る。……あなたがたは、主にお会いする事の出来るうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼に憐れみを施される。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる。わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種蒔く者に種を与え、食べる者に糧を与える。このように、わが口から出る言葉も、むなしく私に帰らない。私の喜ぶところの事をなし、私が命じ送った事を果す。あなたがたは喜びをもって出てきて、安らかに導かれて行く。」（1～12節）

私達の身辺は、このところ、新型コロナの脅威や、異常気象や地震などの自然災害に見舞われ、平穏無事とは言えない状況が続いています。そういう時だからこそ、一層、神・キリストの言葉、護り、導きに立ち帰るべきだと思います。こういった事は、マスコミでは聞くことが出来ません。現象面での対応策を語ることに終始しています。主イエスは、

「からだを殺しても、魂を殺す事の出来ない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のある方を恐れなさい。」

と語っておられます（マタイ伝10章28節、ルカ伝12章4～5節）。わたしたちは、現象面の奥の「天の次元」から語りかけられている・主キリストの永遠の御言葉を心と霊の耳で聴き、それを支えとし、指針として日々を、主キリストの賜う平安と喜びの中で「勝利の日々」を過ごしたいと祈念いたします。

福音の原点（マタイ伝9章12～13節）

２０２１年10月31日

聖句：

「健かなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来たれり」（マタイ9・12～13）

イエスがこの言葉を語られたのは、取税人マタイがイエスの「我に従へ」との御声に応じてイエスに従い、食事の席にお招きしたところ、

「多くの取税人・罪人ら来たりて、イエス及び弟子たちと共に列る。パリサイ人これを見て弟子たちに言ふ『なに故なんじらの師は、取税人・罪人らと共に食するか』」

との問答がなされた場においてです。イエスはパリサイ人の問い掛けに対して、

「健かなる者は医者を要せず、ただ病める者これを要す。なんじら往きて学べ『われ憐憫を好みて、犠牲を好まず』とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来たれり」

と答えておられます。取税人は、支配者であるローマ皇帝のための徴税の役を担うことから、ユダヤ人は反感を抱いていました。罪人とは、犯罪者という意味ではなく、ユダヤの「聖なる律法」を知らない無知なる輩としてパリサイ人から軽蔑されていました。イエスは、このような「取税人・罪人」の友でした。その「心の痛み」を深く思いやっておられたのだと思います。ところで、「義人」（健やかなる者）とは、いったい、どんな人でしょうか？

そこで想い起こすのは、ルカ伝18章9～14節の場面です。その冒頭に

「己を義と信じ、他人を軽しむる者どもに、此の譬を言ひたまふ」

とあり、

「二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は取税人なり。パリサイ人たちて心の中に斯く祈る『神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。我は一週のうちに二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ』然るに取税人は遥かに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言ふ『神よ、罪人なる我を憐れみたまへ』われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おほよそ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり」

と。我々は、「神を求める」時にも、ややもすれば、自己保全のためであって、「神に己を捧げ、神は神であるが故にこれを尊ぶ」といった角度ではありません。主イエスがいつも、

「汝の聖意をこの身を通して実現してください」

と祈られた祈りに、徹して歩みたく願います。そのような心根で生きる者には、

「すべて労する者・重荷を負ふ者、われに来たれ、われ汝らを休ません」（マタイ11・28）

との御言葉や、ヨハネ伝16章33節の御言葉を以て、支えてくださいます。

「天国人」の存在の拠り所と使命

２０２１年11月７日

聖句：

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」（マタイによる福音書４章４節）

荒野における40日間の断食の後に空腹を覚えられたイエスに対して、悪魔は

「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」

と言って誘惑した。これに対してイエスは、上記の言葉を以てお答えになった。人間は自然的存在としては、パン（生存を支える物質的な手段）無しには生きることが出来ない。と同時に、自然界を超えた「霊の次元」に生きる「霊的存在者」としては、

「神の口から出る一つ一つの言葉

によって、はじめて、その霊的生命を保持し、養い、全うすることができる。主イエスは、そのことを「命がけで」貫いてくださったのである。人間の地上での営みは、政治・経済・福利厚生等の全分野を総動員して、地球環境の安全と人類の平和的共存を目標としている。そして宗教に関しては、過去の苦い歴史的経験から、国家（政治）は直接関与せず、個人の自由に委ねられている。自由を保障された個人が、その自由を活かして「霊的存在者」としての自覚の下に、自然的生命を超えた「霊的生命（永遠の生命）」を求めるようにと神・キリストは望んでおられるのに、それに気付かないで、各人の描く幸福を求めて日々の営みを積み重ねているのが人間の現実の姿であろう。

また、政治の世界では、特に選挙においては「民意」が最高の地位を占める。「民意」が「神様」なのである。「民主」主義社会なのだから当然である。しかし「民意」が健全なもので在るためには、「民意」を構成する各個人が、経済的利害得失に捉われることなく、それを超えた「理想」・「理念」を尊ぶ気風を失ってはならない。創世記の冒頭に

「初めに、神は天地を創造された。」

とある。この世界の主役は「神」なのである。神によって創造された人が神の意志（聖意）を求めるのは当然のことである。

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。」

との主イエスの御言葉を私達は、その角度から聴き、それぞれの生活の場で実践し、各自の生き方によって顕わして行く責任がある。主キリストは、弟子たちとの別れに際して、

「あなたがたが　わたしを選んだのではない。わたしが　あなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしが　あなたがたを任命したのである。」（ヨハネによる福音書15章16節）

と激励された。これは、私達に対する主キリストの励ましの言葉として受け取りたい。私達は、主キリストの「証し人」なのだから。

聖言と偕なる生活

２０２１年11月14日
奥田昌道

聖句：

「汝の聖言は わが足の燈火、わが路の光なり」（詩篇119篇105節）

旧約聖書中の「詩篇」は、讃美と祈りの書です。主キリストも愛読なさったようです。今回は、文語訳聖書の詩篇の中から幾つかを選び、皆様と共に味わい、わたしたちの祈りの助けとしたいと思います。

① 19篇（抜粋）「もろもろの天は神の栄光をあらはし、穹蒼は その聖手の所作をしめす。この日 言を かの日につたへ、この夜 知識をかの夜におくる。語らず言はず、その声きこえざるに、そのひびきは全地に遍く、その言は地の極にまで及ぶ、神は かしこに あげばりを日のために設けたまへり。日は新郎が祝いの殿を出づるごとく、勇士が競ひ走るを喜ぶに似たり。その出で立つや天の涯よりし、その運り行くや天の極にいたる、物として そのあたたまりを被らざるはなし。」

② 33篇「義しき者よ主によりて喜べ、讃美は直き者に適はしきなり。新しき歌を主に向ひてうたひ、歓喜の声をあげて 巧みに琴を書きならせ。もろもろの天は主の聖言によりて成り、天の萬軍は主の口の気によりて造られたり。主を己が神とする国は さひはひなり 主 嗣業にせんとて選びたまへるその民は幸福なり。」

③ 34篇「義しき者 叫びたれば主これを聴きて、そのすべての患難より援け出したまへり。主は心の傷み悲しめる者に近く在して、たましひの悔ひくづほれたる者を救ひ給ふ。義しき者は患難おほし、されど主は 皆その中より援け出だしたまふ。主は 彼が すべての骨を護り給ふ、その一つだに 折らることなし。」

④ 46篇「神は我らの避け所 また力なり、悩めるときの最近き助なり。」

⑤ 119篇「汝の聖言は 我を活かししが故に、今もなほ わが艱難のときの慰めなり。」（50）

「聖言うち披くれば光を放ちて、愚かなる者を慧からしむ。」（130）

⑥ 121篇（京都召団の応援歌）「われ山に向ひて目を挙ぐ、わが援助は何処より来るや。わが援助は天地をつくり給へる主より来る。」

⑦ 130篇「主よ、汝もし 諸々の不義に目をとめたまはば、誰かよく立つことを得んや。されど汝に赦しあれば、人におそれ畏まれ給ふべし。」（3～4節）

⑧ 139篇 1～18、23～24

天国人の拠り所と現実

２０２１年11月21日

聖句：

①「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。」（ヨハネ伝福音書3章16節～17節）

②「人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。」（ヨハネ伝福音書6章63節）

③「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。（中略）だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。」（ヨハネ伝福音書3章3節、5節）

④「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。しかし、すべてこれらの事は、神から出ている。神はキリストによって、わたしたちを ご自分に和解させ、かつ和解の務めを わたしたちに授けてくださった。すなわち、神はキリストにおいて世をご自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである。」（コリント人への第二の手紙5章17節～19節）

⑤「今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。なぜなら、キリスト・イエスにある いのちの御霊の法則は、罪と死との法則から あなたを解放したからである。」（ローマ人への手紙8章1節～2節）

⑥「わたしは よみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたは これを信じるか」。（ヨハネ伝福音書11章25節～26節）

⑦「わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。」（コリント人への第二の手紙4章16節）

⑧「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊と まことをもって礼拝すべきである」。（ヨハネ伝福音書4章24節）

⑨「肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。」（コリント人への第一の手紙15章42～44節、50節）

⑩「自由を得させるために、キリストは わたしたちを解放してくださったのである。だから、堅く立って、二度と奴隷のくびきに つながれては ならない。」（ガラテヤ書5章1節）

神（主キリスト）の「選び」と選ばれた者の「使命」

２０２１年11月28日

聖句：

①「あなたがたが わたしを選んだのではない。わたしが あなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたが わたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えてくださるためである。これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。」（ヨハネ福音書15章16～17節）

②「ヤコブよ、あなたを創造された主は こう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主は いま こう言われる、「恐れるな、わたしは あなたを あがなった。わたしは あなたの名を呼んだ、あなたは わたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしは あなたと共におる。川の中を過ぎるとき、水は あなたの上に あふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎も あなたに燃えつくことがない。わたしは あなたの神、主である。イスラエルの聖者、あなたの救主である。（中略）すべて わが名をもって となえられる者を こさせよ。わたしは彼らを わが栄光のために創造し、これを造り、これを仕立てた。」（イザヤ書43章1～7節）

「この民は、わが誉を述べさせるために わたしが自分のために造ったものである。（中略）わたしこそ、わたし自身のためにあなたの とがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。」（21～25節）

③「ヤコブよ、イスラエルよ、これらの事を心にとめよ。あなたは わがしもべだから。わたしは あなたを造った、あなたは わがしもべだ。イスラエルよ、わたしは あなたを忘れない。わたしは あなたの とがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしは あなたを あがなったから。」（イザヤ書44章21～22節）

④「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残ったすべての者よ、生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出た時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしは あなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」（イザヤ書46章3～4節）

⑤　ヨハネ伝15章1～17節よりの抜粋

「わたしは葡萄の木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしに繋がっており、また わたしがその人と繋がっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つ できないからである。

あなたがたが わたしに繋がっており、わたしの言葉が あなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば与えられる。あなたがたが実を豊かに結び、そして わたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。父がわたしを愛されたように、わたしも あなたがたを愛した。わたしの愛の内に居なさい。あなたがたも互に愛し合いなさい。」

２０２１年　クリスマス集会　ご案内

２０２１年11月28日

今年のクリスマス集会を下記のとおり開催致します。

現在、幸いにも、各地で新型コロナウイルス感染者の減少が続いています。そこで一定の感染予防措置を取ったうえ、昨年の集会より少し内容を増やし、午前のクリスマス講筵の後、昼食（黙食）をはさんで、午後の一時間余りを「感話会及び祈り会」と致します。

御参加の皆様には、マスクの着用や、席を空けての着席をお願いいたします。

皆様とともに、主キリストの御降誕をお祝いし、一年の恵みと御護りに感謝する集会としたいと考えます。

記

日　時　12月26日（日）　10時30分～14時00分

会　場　KKR京都くに荘　4階比叡の間（上京区河原町通り荒神口上る東入る）
Tel.　075-222-0092

会　費　無料（会場費・昼食費は京都キリスト召団にて負担いたします）

日　程

午前の部

講　筵　10時30分～12時00分　奥田昌道先生

午後の部

（1）昼　食（黙食）12時15分～12時45分

（2）感話会及び祈り会　13時00分～14時00分

★参加を御希望の方は、会場設営の関係上、12月18日（土）までに、電話、郵便又はメールで、参加者名、昼食の要否をお知らせください。

「労働（働くこと）」と「祈り（祈ること）」とは一つ

２０２１年12月５日

聖句：

「イエスは言われた。『わたしには、あなたがたの知らない食物がある。わたしの食物というのは、わたしを遣わされたかたの御意を行い、その御業を成し遂げることである。』」（ヨハネ伝福音書４章32～34節）

旧約聖書の創世記第３章では、アダムとエバが神の言葉（命令）に反して禁断の木の実を食べたことから、アダムは神から次のような宣告を受ける。

「地はあなたのために呪われ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、茨とあざみとを生じ、あなたは野の草を食べる。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土から取られたのだから、あなたは塵だから塵に帰る。」

と。こうして、本来は楽しく、生き甲斐のあるはずの労働が、「苦役」となってしまった。苦役としての労働は、労働者にとっては、「短ければ短いほど良い」（生活できる額の賃金がもらえるなら）ことになる。このような「苦役としての労働」観を打ち破り、労働は、たとえ苦しくても「喜び」を伴うものであることを示されたのが主キリストであった。それが、上記の主キリストの言葉であった。即ち、神の御心（御意）を行い、その御業を実現することが「わたしの食物」だと言われた。『眠られぬ夜のために』の著者カール・ヒルティは、「神の傍近くに在って、有益な仕事をすること」に幸福を見出した。もちろん、人は精神的・肉体的諸条件によって、働きたくても働けないことがある。どのような状況のもとでも、主キリストに全托して行くことが大切であって、置かれた状況の下で主キリストの導きに委ねて行くならば、主は最善の道を備えてくださることを信じて行きたい。

以上に述べたことに留意した上で、福音書から「労働」に関する箇所を取り上げてみる。

（１）マタイ伝福音書20章１～16節。

「天国は、ある家の主人が、自分の葡萄園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。彼は労働者たちと、一日一デナリの約束をして彼らを葡萄園に送った。」

そして、九時頃、十二時頃、三時頃、五時頃に仕事を求めて立っている人々にも声をかけ、一デナリの約束をして、葡萄園に送った。夕方になって、管理人に、労働者へ賃金を支払うに当たって、最後に来た人々から順々に支払うように命じたところ、それぞれがもらったのは、同額の一デナリであった。朝早くから働いた人々が不平をもらしたのに対して、主人は、

「約束通りにしただけだ」

と言って、取り合わなかった。

（２）ルカ伝福音書15章11～32節。放蕩息子の帰還を無条件に喜ぶ父と勤勉な兄の怒りと不満。兄は、父の下で働くことの幸い（ヒルティの「神の傍近くに在って、有益な仕事をすること」の幸い）を自覚していない。

「思い煩い」からの解放

２０２１年12月12日

聖句（見出し）：

① 旧約聖書　詩篇94篇17～19節
② 新約聖書　マタイ伝福音書6章25～34節
③ 新約聖書　ペテロ前書5章7節
④ 新約聖書　ピリピ書4章4～7節

聖句（引用）：

① 詩篇94篇17～19節

「もし主 我を助け給はざりせば、わが霊魂(たましひ)は、とくに幽寂(おとなき)ところに住ひしならん。されど わが足すべりぬと言ひしとき 主よ 汝の憐憫(あはれみ)われを支へたまへり。わがうちに思ひ煩ひの みつる時、汝の慰め わがたましひを喜ばせたまふ。」

② マタイ伝6章25～34節

「この故に我なんじらに告ぐ、何を食らひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を着んと体のことを思ひ煩ふな。生命は糧(かて)にまさり、体は衣に勝(まさ)るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遥(はるじゃ)に優るる者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長(たけ)一尺を加へ得んや。又なにゆえ衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ、労せず、紡がざるなり。されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装(よそほひ)この花の一つにも及(し)かざりき。今日ありて明日 炉に投げ入れらるる野の草をも、神は かく装ひ給へば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。さらば何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思ひ煩ふな。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の 汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の国と神の義とを求めよ、さらば凡て これらの物は汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦労は一日にて足れり。」

③ ペテロ書5章7節

「又もろもろの心労(こころづかひ)を神に委ねよ、神なんじらの為に慮(おもん)ばかり給へばなり。」

④ ピリピ書4章4～7節

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言ふ、なんじら喜べ、凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ。主は近し。何事をも思ひ煩ふな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思ひとをキリスト・イエスによりて守らん。」

（あとがき）「思い煩いの多い悩める奥田」は、主キリストによって初めて、平安と希望を頂き、「神・キリスト讃美の人生」を生きる者となりました。

葡萄樹とその枝
――天国人の自覚と使命（ヨハネ伝15章）

２０２１年12月19日

聖句：

①「我は葡萄の樹、汝らは枝なり。人もし我に居り、我また彼に居らば、多くの実を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも為し能はず。」「汝ら もし我に居り、わが言汝らに居らば、何にても望に随ひて求めよ、さらば成らん。汝ら 多くの実を結ばば、わが父は栄光を受け給ふべし、而して汝ら わが弟子とならん。父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。」（ヨハネ伝15章5～9節）

②「主は我らの為に生命を棄て給へり、之によりて愛といふことを知りたり、我らもまた兄弟のために生命を棄つべきなり。世の財宝を持ちて 兄弟の窮乏を見、反って憐憫の心を閉づる者は、いかで神の愛その内にあらんや、若子よ、我ら言と舌とをもて相愛することなく、行為と眞實とを以てすべし。」（ヨハネ第一書3章16節）

③「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非礼を行はず、己の利を求めず、憤ほらず、人の悪を念はず、不義を喜ばずして、眞理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事耐ふるなり。愛は長久までも絶ゆることなし。……げに信仰と希望と愛と 此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。」（コリント前書13章4～13節）

④「されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父は、その日を悪しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり。汝ら 己を愛する者を愛すとも何の報いをか得べき、取税人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」（マタイ伝5章44～48節）

⑤　マタイ伝25章31～46節における「羊と山羊」。

わたしたちの自然的生命は、太陽・空気・水・大地という自然の恵み無くしては存在し得ない。霊止としての霊の命は、主キリストの十字架の贖罪と聖霊（いのちの御霊）の賦与によって、初めて生み出され、存続することが出来ることとなった。ガラテヤ書2章20節のパウロの告白の通りである。そして、新しく生かされている者は、主キリストの御心（御意）に適う生き方を希求する。主は、み言葉と御霊とをもって、導き給う。

「**主は即ち御霊なり、主の御霊の在る所には自由あり。我等は、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像に化するなり**」

との希望を賜わって、上記の「愛」を根底として生きる者である。

降誕節集会

クリスマスの恵み

２０２１年12月26日

聖句：

「それ神は その獨子を賜ふほどに 世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。神 その子を世に遣したまへるは、世を審かん為にあらず、彼によりて 世の救はれん為なり。彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は 既に審かれたり。神の獨子の名を信ぜざりしが故なり。その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。すべて悪を行ふ者は 光を にくみて 光に来らず、その行為の責められざらん為なり。眞をおこなふ者は光にきたる、その行為の神によりて行ひたることの顕れん為なり。」（ヨハネ伝3章16節～21節）

「太初に言あり、之に生命あり、この生命は人の光なりき。（中略）言は肉体となりて我らの中に宿りたまへり、我らその栄光を見たり、実に 父の獨子の栄光にして、恩恵と眞理とにて満てり。律法はモーセによりて与へられ、恩恵と眞理とは イエス・キリストによりて来れるなり。未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡にいます獨子の神のみ 之を顕し給へり。」（ヨハネ伝1章1節～18節）

〔奨め〕

「もしも自然界に太陽が存在しなかったら」と想像してください。太陽の存在が、地球にとって、地球上の生きとし生ける存在にとって、有難く、無くてならぬ存在であることが分かる。大気（空気）や水、大地もそうである。自然的存在者としての人間の存在の上で、これらは不可欠であるが、「霊的存在者」としての人間（霊止）にとって、イエス・キリストがいらっしゃらなかったなら、どうであろうか？　そのことを考えると、イエス・キリストの存在と御業が、どんなに大切な、不可欠なものであるかが分かる。神は、主キリストを通して、その御旨と御業を顕わされた。しかし、このことが本当に分かるのは、神・キリストの側からの啓示によって、初めて可能である。生来の人間（いわゆる「肉」なる存在）は、それを本当に知ることが出来ない。ニコデモとの対話において、主イエスが示されたのも、その事であった。実に、キリストが万物の創造主である神を「父なる神」として崇め、その御旨に従順に従い、御旨を全うされた事によって、わたしたちは「死から生（命）へ」と転換させて頂き、「永遠の生命者」に変貌させて頂いた。そして、その後の人生は、「神・キリストの栄光を顕す者」として歩むこととなった。新約聖書は、そのことを示している。その意味で、

「新約聖書は、我について証しする書なり」

と告白することができるのである。